

五月作品

月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

山桃の瘤

水島晴子兵庫

昼のそら勿忘草のいろに澄みとほきむかしの教場が顕つ
なんとなく見捨てられたる風情もて雛ら並べるロビーひと隅
困窮の衝に逝きし父なりき語りたまへよその「文学」を
山桃の瘤ある幹に身を入れてねむりてゐたし半世紀ほど
辻褄の合ふはずもなし思はざる九十年のながきを生きて

相談員番号3

藤野早苗福岡

日の暮れを待ちて去りたる影法師そしてわたしは心底ひとり
鍵かけぬ勝手口より入りきたりご近所さんと桜はなびら
あづさゆみ春たけなはのうつろへば果ての果てなる野のされかうべ
古老らのことのは絮毛のごとき世にビッグデータは全能の神
相談員番号3のわたくしは聴きをり受話器の向かうの闇を

棒状の息

橘芳園新潟

こぞり哭く釈迦涅槃よし青空を一人ながめて死にゆくもよし
たのみごとしつとなふる念仏を雑行ざつぎやうと言ひき坊守の祖母
茂吉より十一若き僧祖父も冬は渡瓶を用ひてゐたり
念仏をとなへて欲をはたさむとする人多し寺のにぎはひ
空也像居並ぶごとくバス待ちの人ら棒状の白き息吐く

ああさうか

小田部雅子静岡

あかあかと山梔子の実の乾きつひそひよどりが今年は来ない
雲の下なにしらせあふ鴨か鳴き交はしつづ焔に降りこず
この国を危ふくするは誰なのか、ボスカそのボス選びしものか
雪原に居並ぶ戦車のニュースより四年、わすれさうなる痛み
ああさうかこれだつたのかと識るときがまた来ん歴史はまたくりかへし

☆

☆



影山 一男 千葉

雪を踏み投票に行くしんしんと赤穂浪士の討入りのごと
高市の高笑ひ聞こえ来るやうな選挙速報ダンスがすんだ
若きらが選びし保守よ君達の未来に翁は責任持てず
日本人おほかた阿呆となりにけり右へ傾く政權選び
70年代の反抗心なき今を悲しみにつつ晩年に立つ

桑原 正紀 東京

スノボートの選手が空を舞ふ映像しばし見惚れてほうと息つく
ヨーロッパの冬の青ぞら渴ききり雲ひとつなきさむき青ぞら
一〇〇パーセント人工雪で設へしハーフパイプは水光りす
報道はオリンピックに占められてウクライナ、ガザの現状見えず
オリンピックにロシアの名無き不自然がいつまでつづく世界危ふし

狩野 一男 東京

けふもちて「閉店」といふスーパーの前を過ぎつつ悲しもわれは
知りたくて『町の本屋はいかにしてつぶれてきたか』知りたくもなし
へりくりゆうの絆』どうあれ、妻と我適宜けんくわし晩年を生く
けふ解散、来月八日総選挙。二月八日が投開票だ
我が老いにわれは従ひ無理無駄を厭につつしみ選挙に行かず

宮里 信輝 神奈川

樹木等は真冬をいかがしてゐるか寒中見舞す相模原公園に
相模原公園代表の「メタセコイア並木」冬は落葉し冬眠状態
メタセコイア並木連なる「フランス式庭園」噴水ショーなし冬は氷りて
青々と冬でも元気な常緑樹クスノキ、タラヨウ、マテバシイたち
いつこからのやうにして来たのかなぼつと一本「パンパスグラス」

高野 公彦 千葉

老いてわが歩みの遅し歩きスマホしてゐる人に追ひ越されたり
散歩しつつ歌推敲し信号の青に気づかず立ち尽くしぬき
歌詠みて歌に感謝し三月の十一日を「歌の日」と呼ぶ
働けば働くほどにわが日本楽にならぬを気づかぬ首相
らいてうも市川房枝も輝けり「政党政治家」の高市思へば

奥村 晃 作* 東京

『天啓』の会の司会を有難うバネリスト牽引せし石川美南さん
塚本邦雄の歌引き合いに語りせし尾崎まゆみさん『天啓』の会で
肩の力の抜き方を知るナイ、ス、害の歌に一票を投じき我は
このところ食べた事ないおうどんが食べたくなったテレビを見てて
新聞の広告を見て鰻をば四尾注文す固定電話で

森重 香代子 山口

早々と連れだち帰る夕鴉山居のわれの頭上ま近を
夕茜浴びる街区見下してひとり佇む山の団地に
紅き花点々とつけ寒椿庭に立ちをり如月に入る
一夜さを傍に眠りてくれし娘の帰りゆくなり母を残して
甲斐甲斐しく家事をこなして帰りゆく運転席の娘を抱きしめぬ

小島 ゆかり 東京

置き配を置きくれし人の手をおもふ風つよき寒晴れの土曜日
自分宛ての置き配の荷物とどきたりダンボールの全面冷えて
いつのまに風はやみしかダンボールたたみ平たきゆふべとなりぬ
軍事をいそぐ日本のゆふぞらに孫がゆびさすかき揚げの雲
きざらぎはこゑ枯れやすしざらざらのひかりまじりの風に飛ぶ過去

木畑 紀子 京都

一夜一話「橋ものがたり」読み継ぎて寒の十日をふかく眠りぬ
悲話なれどをはりにほのか救ひあり老いて身に沁む藤沢周平
「餌やるな、糞でよ」これる隣家より苦情が来たり(さよなら雀)
雀来ぬあさのしげきさんさんと春日のそそぐ庭のさびしさ
たけやぶをたづねてみればにぎやかな雀らのこゑ(元氣でお暮らし)

島田 暉 神奈川

白鳥の両羽根広くはばたきて海へ向かへり旅ころろわく
ベネズエラを略奪したるアメリカよ赤きカンナが否と首振る
冬の村に黒熊出でて新首相口紅尖り再軍備説く
胸うちに菜の花一輪咲かせたし菜の花畑に女神を呼ばむ
流れつつ水ゆたかなる白波の生まれては消え消えては生まる

大松 達 知* 東京

雨の下に誓と書いてユキと読むそんなアジアの人肌が好き
コンビニの多さは国のさびしさか、0118を引けば元号になる
やすやすと味噌は溶かれてこんなにも負けながら勝つすがたはありぬ
火星にも労働歌ある来世紀。ドラマにはまだ日本語がある
過渡期とは時がわたってゆくとおりに人を置き去りにして

田宮 朋子 新潟

シェフハットほどの新雪つもりをウッドデッキに置く鉢の上
マシユマロのやうな深雪におほはれて戸外は絵本のなかの村めく
いつぼんの国道、木々の黒のほかあたりいちめん(トミオカホワイト)
夜の窓すこし開ければ雪鬼の冷たい息が首すぢを吹く
一メートルの積雪のうへ早足でよぎりゆくのは一羽の雉子

津金 規雄 神奈川

刈り込まれ栗は裸木となり果てつ冬青空を走る貫乳
大鷹の直線飛翔が頭上過ぐその間三秒眼に刻印す
昼前の公園ひそか冬陽さすベンチの男も影像と化す
年輪の株の菓子の一とかけらふふめば甘く時が過ぎゆく
はばたかず鳶のよぎりし一角を科学の粹の機が高く航く

小山 富紀子 京都

大方は味見をせずに贈られる包装華美なバレンタインチョコ
あの人もこの人ももう空の上チョコレット売場見て回るだけ
盃を持つ指じよじよにぬくくなる君がそそげる酒のぬくさに
友詠みし父御の植ゑし山茶花もしんしんと雪に埋もれてをらむ
四人が二人となれど雪の夜は父母も囲みしこの土鍋出す

清水 正子 神奈川

旅に出ることなく老いの日々を生きアルプス越えのハンニバルおもふ
どか雪の越後堀之内なつかしも校庭の柵二歌碑うもれぬむ
「言の葉の泉」届きぬルルドの水汲むごとく読みこころ澄みゆく
モンタンがロンタンロンタンと唄ひぬし「詩人の魂」いいなあロンタン
折れし針がルルの空き瓶に溜りをり針供養など疾うに忘れて

福士りか 青森

磯野家の間取りは書けるが夢に見る我が家はエッシャーの絵のごとく建つ
ひとひとり通れる道の両側で阿と咩の息なかなかあはず
炊飯器は寒のあしたの玉手箱もわつもわつと甘い湯気たつ
雨降りて冷えて氷となる雪をけふは砕かむ晴れ間を待ちて
ここぞといふ一点ねらひ振りおろす鶴嘴なれど振りおろすのみ

田宮朋子歌集 令和7年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

光に濡れる コスモス叢書第1260編 角川書店

著者住所 〒940-2056 新潟県長岡市王番田町二八〇―一

桑原正紀著書二冊

ようこそ、歌の世界へ 歌書
コスモス叢書第1261編 本阿弥書店

令和7年9月刊 一七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

第18回小野市詩歌文学賞受賞

第十歌集
麦熟るるころ コスモス叢書第1270編 本阿弥書店

令和7年11月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九―八―一〇六

風間博夫 千葉

家々に爪切りひとつはありたるをひとつ大事に使ひつづける
爪を切るための爪切りパチと音いさぎよく立て爪を切りたり
曖昧な音にはあらずパチと音たてて爪切る爪切りの音
パチと音立てて爪切る爪切りの音のたつき爪は切れたり
ふたつみつなくともよろしひとつある爪切り長くつかひつづける

奥村晃作歌集 令和7年9月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

天啓 コスモス叢書第1262編 短歌研究社

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六

島田暉歌集 令和7年10月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

昭和の鴉 コスモス叢書第1259編 角川書店

著者住所 〒246-0015 神奈川県横浜市瀬谷区本郷一―一四―一六

小島なお歌集 令和7年12月刊 二〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

卵降る コスモス叢書第1263編 左右社

連絡先 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷三二五五―一二二

ヴァイパルテノンB1 左右社

田中愛子 埼玉

傘をさすふたり連れ多しきさらぎの投票所へと向かふわき道
かじかめる手にて入れたる雪の日のわが一票は死票となる
とは言へどわれのあしたの短歌にはさしさはりなし右党一強
ほほゑみも恐ろしきものと身をもつてをしへてくれる総理大臣
午後の日ぬくくてしばし従きゆけり金の巻き毛の半ズボンの子に

水上比呂美 東京

百万の蔵書の中に目覚めある数冊あるらむ春の東洋文庫
シーボルト事件の地図がこれなのか伊能図は蝦夷のある日本地図
「王様と私」のラーマ四世の書簡がありぬ硝子ケースに
表紙絵は袴、帯刀のうさぎ殿ちりめん本の Kachi-Kachi Mountain
三世紀末の著書なる『魏志倭人伝』倭国「卑彌呼」の表記いやだわ

鈴木竹志 愛知

わが歌に活を入れむと冬鳥の歌に向かへり風呂出でてより
冬の夜に読みたき歌集そのひとつ二宮冬鳥『壺中詠草』
冬鳥のこわね声厳しきを茫然と聞く三十五年前歌集を得むと
冬の夜に春のきざしを感じるとるその時を待つ歌集読みつつ
温風の音さへ少し疎ましくなれるを春のきざしかとふと

原賀環子 東京

漱石の生きた時代のきぶんなりけふ着る羽織の古代むらさき
鉄線の色のむらさき袂長きそでもよけれど炊事には脱ぐ
長き袂この量感に日本のこのころをおもふ不便でもよし
怪談のおもむき有りてそんなすすす「晝あけには森の髪うごくかな」
知るひとの数だけからだほしいなあ あの方にあの方に不義理してゐる

水上英季 神奈川

古代人が作つた装飾品のやう水に揺れてる透菓子すかし麵包ぱん
傷ついた菓子パン海胆はみどり色 ヨツアナカシパンハスノハカシパン
真つ白で五釵子のごとき石ひろひ子は言ふお空から降つてきたね
未来への伝言だらう白妙のオオブンブクに字のやうな彫り
若返り繰り返してゆく紅海月あらたな眼に子を映すのか

大野英子 福岡

強さつてそんなに大事なことですかやさしさよりも大切ですか
私の眼にはかうにしか見えません そのけそこのけ早苗が通る
世の中の埒外にあるるけれど埒頭の西日だけはあたたか
ゆふどきの残照のなか多のころは風にあふられ耐へるしかなし
潮の香の強き入り江はうみどりでありしわたしをひとこゑ鳴かす

松尾祥子 東京

新年も四日となりぬ午後の陽に背を温めつつ『あらたま』ひらく
ダイケアに母送り出し冷凍のスープあたたためお餅を入れる
目に刺さる氷の欠片の童話あり(刺さる)聞くたび疼くうつつしみ
ハイネ詩集持ちて十三歳のわれ地上五センチをふわふわゆきき
手脚伸べくつろぎをるに風呂が言ふ湯あがりのめやすとなりました

鈴木千登世 山口

あの夏のカルキの匂ひなければとも水懐かしき温水プール
水を持つゆらぎにからだ委ねれば重力を解き導ける水
地上では傾ぎゆらめく夫の背が水先案内人として行く水の中
羊水の温もりのある水流をもとほり行けり鯉魚のしなりに
ゆらゆらと目先歩める夫の背に貝殻骨はいまも崖

小鳥な お* 東京

斉藤 梢 宮城

微熱ある視界に架かる歩道橋まなざしのなか雪を刺繍す
雪の日はほの明かりしてオレンジの箱から出される靴の動画
ひざまずく背中骨に手をあてての桜を脱いでここに来たこと
フィヨルドを地図になぞりぬ指先の渦の涯はたてにある飛び込み台
湿原へ 肉の底いに眠りいる白骨をいつか連れ出してゆけ

永遠の「海は青いな」あの日からもう戻らないあこがれの青
魔法瓶にお湯をそそげばほのほのと涙腺ゆるむ寒の朝なり
この空から逃れるやうに飛ぶ鳥は彼かもしれず雪かもしれず
言の葉のひとつひとつに触れながら読めば昔の手紙も老いて
昨年の手帳めくれば父母がまだ生きてゐた如月恋し

うたを味わう ● 高野公彦

つばさのある生き物

春潮はるしほのあらぶるきけば丘こゆる蝶のつ
ばさもまだつよからず 坪野 哲久

蝶は変な飛び方をする。大きな羽をばた
ばた動かして不規則に飛ぶ。エネルギー消
費量の割に、効率が悪そうだ。いつも羽を
ばたばたやらないで、時には風に乗って滑
空すれば楽なのに、と思うが、余計なお世
話かもしれない。滑空するより、ああいう
気ぜわしい飛び方をしてるほうが、よく
目立つ。つまり、あれはオスとメスが交信
し合うために都合のいい飛び方なのかもし

れない。

蝶が空高くあがって、ふと空にまぎれる
ことがある。あの瞬間が好きだ。一つの小
さな魂が宇宙と合体して消える、そんな印
象を受けるからである。

坪野作品は、春先の強い風の中、蝶がけ
んめいに海辺の丘を越えるさまを描写して
いる。いくたびも吹き戻されながら、それ
でも蝶は風に真向かって飛ぶ。沖のほうで
は底こもるやうに海が鳴っている。大自然
の息吹と、小さな蝶の生命感があざやかに
浮かび上がってくる一首だ。歌集『一樹』
より。

ひとの世に混り来てなほうつくしき無
紋の蝶が路次に入りゆく 安永 露子

紋様がなくても蝶は美しい。作者の目に
は、蝶はこの世とは少し違う場所から来た
生き物のように見えるからだろう。この目
立たぬ蝶が、いま路地に入ってゆく。人々
は蝶に気づかない。しかしその路地には、
蝶の軌跡が、ほそい清らかな一すじの線と
して残されるのである。歌集『蝶紋』より。
(『わが心の歌』より再録)